



双子の姉妹がいつも支えてくれた

十年前からフィリピンのルソン島北部山岳民族への奨学金制度が始まったが、両国一人

イフガオの娘たち

ずつの担当神父を通じて、極めて小規模なものだ。フィリピンは国民の



八五%がカトリック。ハイスクールも公立と教区立があり、教区立ハイスクールで、成績は良いが貧しくて大学に行けない人に一カ月五千円の奨学金を支給する。

山岳民族は都市の大学に自宅から通えないので寮に入る費用に当てられる。

今、ペソは一円。最初にフィリピンを訪れた一九八一年ごろは八円ぐらいだった。

つまり、この間にペソに対して円は四倍の強さになった。円の力が強いことは奨学金制度では大変役立つ。

妻は最初からこの奨学金制度に関わり、これまで四人の子どもを支援し、最初の子どもは家庭の事情で途中で大学を中退したため中止した。

二番目の子どもがイフガオ族のオロー・ローズ・ロースの卒業式である。北部の避暑地であるバギオ市のセント・ルイス大学で地域経済学を学び、公務員資格試験にも合格した。

しかし日本側の恩地担当神父（現・秋教会）によると山岳民族は差別されることが多く、試験には合格してもまだ公務員になれない。

今はマニラの銀行で働いており、今回の我々の訪問に際しては銀行を一日休み、左半身不自由な妻に小柄な体で付き添ってくれた。

卒業の際、卒業式に出席という誘いもあったが行かなかったのの後日、卒業式の写真が送られてきた。

彼女に続いて支援したのが、イフガオ族の



ラーニー・ローズの卒業式

双子の姉妹。最初は一人支援予定だったが、二人とも進学を希望しており、ほかに支援者がいなかったため我が家で二人を支援することになった。

金銭援助もさることながら「直接交わること」が大切だと痛感させられた。

（元山口放送取締役ラジョ局長）

バギオ市の東、バヨン市のセント・メアリー大学で学び、昨年、卒業した。

今回、三人のイフガオの娘たちと初めて会った。

メリッサとマリッサの双子の姉妹もボントックでの二日間、妻を両側から支えながら付き添ってくれた。

言葉が通じないにもかかわらずさはあったが、本当の自分たちの娘のようには思えた。



担当の恩地神父（中）、

ラーニー・ローズ（左）と妻